

# 利用価値介入が課題価値の認知と授業内容の理解に及ぼす影響

犬塚美輪 (東京学芸大学)

キーワード: 利用価値, 知識構築

## 目 的

個人が特定の課題に取り組みたいと思う価値的な側面を, Eccles & Wigfield(1985)は「課題価値」として定義した。課題価値は複数の側面からなり, 勉強する面白さを価値づける「興味価値」, 望ましい自己の獲得を価値付ける「獲得価値」, 実践の場や試験などで役に立つことを価値づける「利用価値」がある。本研究は, 現実場面で役に立つことに注目する「実践的利用価値」に焦点をあて, 大学生の学修における促進効果を検討する。

先行研究(解良ら, 2016; 解良・中谷, 2014)では, 実践的利用価値を強調する介入が, 学習内容の価値の認知や学習行動にポジティブな影響を示すことを示している。一方, これらの研究では, 利用価値介入が学習者の知識構築に与える影響は検討されていない。利用価値介入が適応的な学習行動に結びつくのであれば, より一貫した知識構築に結びつくことが期待される。一方, 利用価値を強調されることによって, 視点が偏りすぎれば, 重要な概念が定着市内などのネガティブな影響を及ぼす可能性もあるだろう。

そこで本研究では, 学生に現実場面での有効性を検討させる利用価値介入が, 課題価値の認知と知識獲得にどのような影響があるかを検討することを目的とする。

## 方 法

**対象者** 教育心理学の講義を履修した学生のうち, 実験参加に書面で同意した 86 名を対象とした。参加者は教職免許取得のための必修科目の一つとして講義を受講していた。

**材料** 課題価値質問紙 (教育心理学を学ぶことの価値), 動機づけ調整方略質問紙 (やる気が起きないときにどのように対応するか), 事後テスト (用語や事実の空所補充 13 問, 記述 4 問) を用いた。

**計画** 対象者は授業受講前に課題価値認知質問紙と普段の学習における動機づけ調整方略質問紙に回答した。その後, 対象者を無作為に利用価値介入群(以下, 介入群)と要約群に分け, 授業の導入と振り返りにおいて異なるワークシートに記入させた。介入群は, 導入と振り返りのワークシートで「授業内容が将来の生活にどのように役に立つか」を考えて記入するようさせた。要約群には導入では関連知識を思い出すよう指示し, 振り返りでは授業内容の要約を書くよう指示した。介入を

5 回実施し, 第 6 回授業時に事後テストと課題価値質問紙, 動機づけ調整方略質問紙を実施した。

## 結果と考察

**得点化** 課題価値質問紙の事前と事後の回答それぞれについて因子分析 (最尤法 PROMAX 回転) を実施した。事前の結果から「獲得制度価値」「実践的利用価値」「興味価値」の 3 因子を抽出した。獲得価値と制度的利用価値がまとまったが, 概ね同様の枠組みで解釈できた。この因子構造に基づいて 3 つの尺度得点を算出した。動機づけ調整方略質問紙についてもそれぞれについて探索的因子分析 (最尤法 PROMAX 回転) を実施し, その結果に基づいて「成績重視 (例: 単位を取るためだと考える)」と「興味高揚 (例: 自分の興味があることと関連させる)」の 2 つの尺度得点を算出した。事後テストは, 空所補充問題は正答を 1 点, 記述問題は完全正答を 2 点, 部分正答を 1 点として採点し, それぞれの合計点を分析に用いた。

**介入の効果** 課題価値の下位尺度得点を従属変数とし, 条件と時期を独立変数とした混合計画分散分析を実施したが, どの下位尺度においても結果は有意ではなかった。次に, 授業に対する動機づけ調整方略を従属変数とし, 事前に実施した普段の学習に対する動機づけ調整方略を共変量, 条件を独立変数とした共分散分析を行ったが, 有意な結果は得られなかった。これらの検討においては, 先行研究の結果を追認できなかった。先行研究でも変化の程度は大きくないため, 本研究では十分な検定力が得られなかった可能性がある。

事後テストについての分析では, 空所補充問題には群間で有意な差は見られなかった。一方, 記述問題の得点は, 強調群 ( $M=3.91$ ,  $SD=0.46$ ) のほうが要約群 ( $M=2.80$ ,  $SD=0.43$ ) より得点が高く, 有意ではないものの中程度の効果量が得られた ( $p=.08$ ,  $d=0.50$ )。実践的利用価値強調が説明や解釈を求める問題のパフォーマンスを向上させることが示唆された。記述内の単語生起頻度と条件の共起関係について分析を行ったところ, 概念の説明を求める問題では要約群において, 日常的な場面での応用問題では強調群において, 授業で学んだ専門用語が多く用いられていた。これらの結果から, 利用価値介入が一貫した知識構築が促進する可能性が示唆されるとともに, 利用価値介入が知識を関連づける文脈として働くと考えられた。